

桂林莊雜詠諸生に示す（その二） 広瀬淡窓

遙かに 思う 白髪 門に 倚るの 情

官学 三年 業 未だ 成らず

一夜 秋風 老樹を 揺がし

孤窓 枕を 敬てて 客心 驚く

遙思白髪倚門情 官學三年業未成  
一夜秋風搖老樹 孤窓敬枕客心驚

解説 塾生に対して故郷の親を思つて勉学すべきことを述べた詩。

語釈 ※白髪 白髪の両親。 ※倚門 他郷にいる我が子の帰りを待ちわびること。 ※官学 遊学すること。 官学と同じ。 ※揺老樹 風が古木を吹き揺るがすというのが表面の意味であるが、老年の両親のことに例えている。 ※孤窓 ひとり寝の窓。 ※敬枕 枕に頭をつけて、寝たまま耳をそばだてる。 ※客心驚 旅にあるものの心は心細く、ものに対して衝撃をうけやすい。

通釈 遠い故郷では白髪となった両親がわが子の帰りを待ちわびておられることであろう。それなのに学は進まず、いたずらに月日の発つことばかり早く、この塾に在学してすでに三年。夜になって秋風が吹き荒れ、窓外の老木の枝をゆるがすのに耳を傾けると、老いた両親のことが気にかかり、努力して一日も早く業を終えて帰り、孝行を尽くしたいという心もちが起るのである。